

【学位論文審査の要旨】

公開審査は2017年9月23日に開催された。

長いあいだ、SFは、創作面でもまた研究評論においても、中国近現代文学の不毛のジャンルという感があった。もちろん、劉慈欣の『三体』（英訳）が2017年度のヒューゴー賞を受賞したことに象徴されるように、近年では読者層の飛躍的な拡大と優れた作家の登場によって中国SF界は圧倒的な隆盛期を迎えており、それに伴って近代中国のSFないし科学的啓蒙言説の歴史に向けられるまなざしもその関心の度を増し、以前に比べれば注目度は高くなっているが、大戦前（民国期）SFについてのまとまった研究はまだない。

本論文はそうした現状をふまえて、早期SFを含む民国期科学言説の全容を解明するという気宇壮大な課題に挑んだものであるが、なによりもまず、綿密な資料調査と粘り強い実証的態度によって、日本はもちろん中国の先行研究をも凌駕する成果を挙げたことが本論文の最大の特徴である。なかんづく、第1～3章の顧均正に関する論考は、従来から彼の創作と信じられ、中国早期ハードSFの最高峰として高い評価が定着していた「和平的夢」、「倫敦奇疫」、「在北極底下」（1939-40年）が、アメリカのSF専門パルプ・マガジン掲載作の翻訳（翻案）であったという事実を指摘してその詳細を明らかにした第2章を筆頭に、彼の初期の編集者生活から「科学小品文」ジャンルの書き手への自覚的転換を論じた第1章、性転換を扱ったミステリ風の作品「性変」（1940年）を同時代の世界的な性言説との関わりも含めて論じた第3章、いずれも高く評価できるものである。（事実、第2章の一部は招待講演として中国のSF関係シンポジウムで発表され、大きな反響を呼んだ。）

もちろん、関野の関心是个々のSF作家・作品にとどまるものではなく、20世紀中国において有力なジャンルとして成立した科学知識散文（「科学小品文」）や科学普及読物を含めた科学言説のありようを総体として把握することにあり、第4章、第5章はその成果であるが、この方面の探求はいまだ道半ばといわなければならない。第4章の高士其研究は、中国共産党員として解放後はこの方面の中心人物であった人物に着目し、彼が関わった1930年代の科学的小品文運動や風変わりな小説「菌児自伝」の分析など、解放前の彼の文筆活動に寄り添うかたちで、平易でありながら感化力のある表現への努力の軌跡を説得的に描き出し、第5章、中華自然科学社刊行雑誌『科学世界』（1932～37年）を扱った論考は、同誌の「科学小説」を詳細に分析したものであるが、大衆啓蒙的な意義を強く担わされたそうした言説については、ミクロレベルの個々人の表現活動についての考察と同時に、いわばマクロレベルでの検討がより一層不可欠であり、例えば、第5章でわずかに言及されている国民党主導の「科学化運動」との関係、また、ソビエトロシアからの影響も含めて、今後さらに解明しなければならない問題が残っている。

こうした点については公開審査の場でも指摘があり、関野自身も今後の課題として自覚していることであるが、本論文が中国早期SF研究として従来の知見を一新する事実指摘を含む高い水準にあることに疑問の余地はなく、審査員一同は関野に博士（文学）の学位を授与することが適当であるとの結論で一致した。